

現在と未来のために軍事大国の道を許さず、
列島で平和のうたごえを響かせましょう!

2023年 第56回 日本のうたごえ全国協議会総会

2023年3月4日(土)～5日(日)

北区赤羽会館

決 定 集

総会概要	1
はじめに	2
私たちをとりまく情勢	3
2022年度活動のまとめ	6
① 青年のうたごえ	6
② 歌をつくり広げる活動	6
③ 合唱発表会運動、地域・分野のうたごえ祭典	8
④ うたごえ新聞・季刊「日本のうたごえ」	9
⑤ 学習・教育活動	10
⑥ 組織建設連帯活動	12
⑦ 事業・普及活動	12
⑧ 郷土のうたと踊り	12
⑨ 専門家及び他団体との協働連帯活動	13
⑩ 国際交流	13
⑪ 75周年記念事業	13
2023年・活動方針	14
おわりに	17
2023年 主な日程・予定	18
2022年 表彰団体・個人一覧	18
2022年 入退会団体一覧	19

日本のうたごえ全国協議会

〒169-0072 東京都新宿区大久保2-16-36

TEL 03-3200-0106 FAX 03-3200-0193 E-MAIL info@utago.e.gr.jp

総会概要

- 参加者 代議員 105人(定数154)、評議員 32人、オブザーバー 11人(内オンライン1人)、事務局など 9人 総参加者 157人、
○36都道府県、○5産業別、○2中央団体、委任状21通、

- 開会挨拶・総会運営体制提案 渡辺享則(評議員・長野)

●総会運営体制

- 議事運営委員 ◎舟橋幹雄(評議員・愛知)、田中嘉治(評議員・自治体)、轟志保子(評議員・東京)、三輪純永(評議員・うたごえ新聞社)、渡辺享則(評議員・長野)、大井かつ江(評議員・東京)
- 議長団 森川恵美子(評議員・長崎)、上田恭敬(代議員・愛媛)、北林亜弓(評議員・大阪)、河地俊広(代議員・北海道)
- 選挙管理委員 加藤実(代議員・愛知)、伊藤常雄(代議員・長野)
- 資格審査委員 堤龍輔(評議員・福岡)、藤田由美子(代議員・東京)
- 書記団 ◎三輪純永、石川道彦
- 事務局 ◎大井かつ江、小澤僖和子、杉浦幸子、石垣正人、掛川貞省(奈良・代議員)、椎橋亨(事務局)
- プロジェクト&配信担当 時田裕二(京都・評議員)、高嶋賢(北海道・評議員)、斉藤一正(事務局)

●祝電・メッセージ(順不同 22団体)

- 全国労働組合総連合、日本国家公務員労働組合連合会、日本医療労働組合連合会、全日本教職員職員組合、全日本民主医療機関連合会、全国商工団体連合会、全国生活と健康を守る会連合会、きょうざれん、治安維持法犠牲者国家賠償要求同盟、日本国民救済会中央本部、日本中国友好協会、日朝協会、明るい革新日本をめざす中央青年学生連絡会議、日

本民主青年同盟中央委員会、日本婦人団体連合会、新日本婦人の会中央本部、婦人民主クラブ、原水爆禁止日本協議会、安保破棄中央実行委員会、日本原水爆被害者団体協議会、文化団体連絡会議、平和・民主・革新の日本をめざす全国の会(革新懇)、日本青年団協議会

●報告・提案

- ◇2022年度活動のまとめ 轟志保子
- ◇2023年度活動方針提案 田中嘉治

●討論 発言 30人 通告 35件

- 記念講演 川田忠明さん(原水爆禁止日本協議会全国担当常任理事・日本平和委員会常任理事・日本平和学会会員)

●財政報告 うたごえ新聞・三輪純永

- 季刊「日本のうたごえ」、全国協議会・大井かつ江
- 会計監査報告・高橋由美

●討論のまとめ 渡辺享則

●採択 代議員定数154人

- 方針案・まとめ、決算・予算 圧倒的多数で採択

●役員選挙

- 常任委員会推薦候補にたいし信任投票 全員が圧倒的多数で信任
- ※選出された新役員

会長・田中嘉治

副会長・舟橋幹雄、三輪純永、渡辺享則
事務局長・轟志保子

事務局次長・大井かつ江

常任委員・朝倉久美子、石川道彦、石垣潔、石垣正人、小澤愷和子、北林亜弓、木村泉、桑田康徳、河野好行、今正秀、斉藤智子、清水雅美、下温湯義和、杉浦幸子、高田龍治、高島賢、竹澤まみ、土屋美和、堤龍輔、時田裕二、西本好道、藤村記一郎、松木郁子、松永朝恵、真船光子、間部友哉、武藤佳子、森川恵美子、山本恵造

会計監査・羽鳥茂、広瀬紀代美

●入・退会承認

●表彰

●新旧役員紹介と挨拶（各々※より挨拶）

新任・※真船光子（以上常任委員）

退任・高橋由美（以上会計監査）

●閉会宣言 議長

第56回

日本のうたごえ全国協議会総会方針

はじめに

昨年12月、愛知で開催された2022うたごえ全国交流会は、3日間でのべ8千人が集い、高らかにうたごえを響かせ大成功をおさめることができた。特筆すべきは、特別音楽会で演奏された青年合同の舞台で、直前までに少人数しか見込めなかったのが正真正銘の（？）大勢の青年たちが集まり、人数の多さと洗練されたうたごえで聴衆を圧倒させたこと。昨年の全国協議会総会で青年が主役となる活動方針を第一に掲げたが、いま、全国の多くの文化団体等にとって高齢化に伴う次代を担う若者の獲得は現下の急務である。うたごえも例外ではなく、極論すれば未来を拓くことができるかどうかの重要な試金石ともなっている。

敗戦の焼け野原の中から産声をあげたうたごえは、本年創立75周年を迎えた。数年前より10の記念事業を計画、既に日本を代表する池辺晋一郎氏ら6人の著名な作曲家に1曲ずつ委嘱した作品集「スタートライン」を出版し、それら作曲者を招いた75周年記念日本のうたごえ祭典を今夏、北海道で開催する。この他の記念事業についても全国の力で一つ一つ成功させていくことが肝要となっている。一方で、本年は、敵基地攻撃能力保有や軍事費2倍の大軍拡など「戦争国家づくり」の道を突き進もうとしている岸田政権が改憲への意欲をみせる中、私たちがうたごえも、広範な市民と連帯しながら、方針に掲げている「6つの止」実現のたたかいを、一層強力に推し進めていく重要な年を迎えている（「私たちを取りまく情勢」参照）。

75周年記念事業を遂行する中で、その原動力は、運動発展の根幹を成す組織建設（加盟・会員数及びうたごえ新聞読者拡大）であることは言うまでもない。

とりわけ、青年の願いや要求を実現していく青年運動を推進するなかで、一人でも多くの青年がうたごえ運動に参画できる体制と活動を強化することが求められている。同時に、うたごえ空白県の克服及びあと1団体の加盟で「協議会」発足が見込まれる地域に対して英知と力を集中することは、新しい道を開くロマンに満ちた活動でもあり、運動75周年から80周年に向かう飛躍の足掛かりを築くものとして重要視しなければならぬ。苦しい時にこそ芸術は昇華する。今年も一年、人々の心に寄り添い、時代を描く作品を創り広げ、いのちと平和を守るうたごえを全国で響かせていくことが重要になっている。

「戦争する国づくり」「阻止のため、**「6つの止」運動をさらに強める希望の年に**

私たちをとりまく情勢

ウクライナに戦禍をもたらした戦争が「絶対悪」であるのと同時に、核兵器もまた「絶対悪」である。使用済み核燃料（核のゴミ）の処理に10万年も要する原発も同様に「絶対悪」、莫大な国の予算を使って、国民・国民に何の益ももたらさない辺野古新基地建設も「絶対悪」、収束が見えずマスク生活から解放されない「新型コロナ」もさらに同じく、日本を再び戦争国家へ導こうと9条改憲に躍起になっている岸田9条改憲政権こそ、「絶対悪」の極みと言える。すなわち私たちが方針に掲げている「6つの止めなければならぬもの」（戦争法、辺野古新基地、原発、核

兵器、コロナ、9条改憲政権）は全て、国民の命の危険に直結する「6つの絶対悪」なのである。従ってこれらは、「生存権、国の社会的使命」を謳った日本国憲法第25条に真つ向から抵触しており、人間の命とくらしを守るために、その全てを排除しなければならない代物なのである。いまこの「絶対悪」がますます肥大化してきており、本年は例年にも増して「6つの止」を強力に推し進めていかなければならない。

〈大軍拡、大増税は「戦争する国づくり」の一里塚〉

岸田政権は、昨年12月、戦後の安全保障政策を大転換する「国家安全保障戦略」「国家防衛戦略」「防衛力整備計画」の安保3文書を「国葬」に引き続き、またもや国会で論議も尽くさず一方的に閣議決定した。最大の「転換」は、歴代政権が違憲としてきた敵基地攻撃能力（反撃能力）の行使に踏み込んだことである。

仮に米軍が戦争を始めれば、日本は武力攻撃を受けていなくても、米軍支援のため自衛隊が相手国内に敵基地攻撃をすることが可能となる。その場合、結果として日本をさらに危険にさらすことになるのは明らかであり、大原則としてきた「専守防衛」を有名無実にする「戦争国家づくり」の一里塚となる。

また、文書が2027年に軍事費をNATO諸国並みのGDPの2%にすると明示したのも重大。23年度からの5年間で総額43兆円とし、不足する年4兆円のうちの3兆円分を国立病院等コロナ対策での決算剰余金や特別会計等の繰入金、歳出改革（社会保障、文教費等の削減）等で捻出するとし、1兆円を復興特別所得税、たばこ税などさらなる税負担を国民に押し付け、財源を確保しようとしている。この大軍拡に突き進むことで、社会保障や教育、子育て予算の充実などの道が閉ざされることは明らかである。

加えて「文化芸術を創造し、享受することが人々の生まれながらの権利」であることを保障する政治に変えていく願いを実現するためにも、文化予算の大幅増額は必須の課題といえる。各国の文化予算が国家予算に占める割合を見ると、フランスが0.92%、韓国が1.24%、ド

イツが0・36%、イギリスが0・15%であるのに対し、日本はわずか0・11%でしかない（令和2年度文化庁委託事業『諸外国の政策等に関する比較調査研究』より）のである。日本の文化予算の割合はフランスの8分の1、韓国の10分の1、ドイツの3分の1程度であり、先進国の文化予算と比べると依然として貧困なのである。現文化庁長官は「文化立国を掲げるのであれば、お金を稼げる産業に育てなければならぬ」と述べているが、「芸術には、産業化がなじまない分野や表現も多く、文化政策を産業振興の道具にする発想では、真の文化立国はおぼつかない」（京都新聞）。

大軍拡・増税路線こそ、岸田首相が自らが唱える「異次元の少子化対策」ならぬ「異次元の戦闘態勢」であり、断じて許すことはできない。

〈沖縄の揺るがぬ民意を国会に届けよう〉

新基地建设「反対」の民意が県レベルで、過去3回の知事選（翁長・デニー再選）、県民投票と4回示されている。去る1月初め、「オール沖縄会議」は、名護市辺野古の米軍キャンプ・シユワブゲート前で、「辺野古新基地建设断念を求める国会請願署名」の実行委員会（実行委員長／稲嶺進）結成集会を開き、沖縄の揺るがぬ新基地ノーの民意を圧倒的多数の署名で示そうと立ち上がった。沖縄で新基地に対する国会請願署名を集めるのは今回初めてである。また、沖縄はじめ馬毛島など南西諸島では、自衛隊の基地建设が強行されようとしている。このことは沖縄・南西諸島を対中国の戦争拠点にして、再び「捨て石」にするものであり、すでに深刻な騒音被害や環境汚染による漁場被害、軍用機墜落の危険性など、重大な問題となっている。

憲法、地方自治を蔑ろにする政治を司法が追認する状況を断ち切るためにも、請願署名運動を成功させることが求められている。うたごえも全国での取り組みを強めたい。

〈大転換となる原発推進政策の撤回を〉

福島第1原発から出る処理水の海洋放出の時期について政府は「今年

春から夏ごろ」と表明しており、地元漁業関係者からは「風評被害が起これば未来が見えない」と憤りの声が上がっている。事故から12年目を迎えようとする今も人が住めない地域が残り、少なくとも2万人以上が福島県外での避難生活を余儀なくされている現実から目を背け、政府は原発再稼働・新增設を前提とした原発回帰に大きく舵を切ろうとしている。

世界的規模で気候危機と呼ぶべき非常事態が起こっているもとで、「脱炭素」を口実に、原発に固執するエネルギー政策は最悪の環境破壊である。加えて、アメリカはじめ先進国の多くが石炭火力からの撤退年限を表明しているのに、日本は撤退を表明しないばかりか、石炭火力の新規建設、輸出計画を推進している。

地球を守り、将来の世代に美しい自然環境を引き継ぐために、石炭火力や原発は相入れない。巨大な精密機械である原発は、極度に地震と津波には弱く、加えて原発には「核のゴミ」など数万年先まで環境を脅かす問題も山積みである。原発頼みのエネルギー政策を撤回させる国民的運動と連帯しながら、歌の力で原発ゼロの世論を高めていくことが重要になっている。

〈核兵器禁止条約の批准をいまこそ日本政府に〉

ロシアのウクライナ侵攻から、1年が経過した。プーチンが核使用も辞さずと威嚇する中で、昨年は核兵器を巡る二つの会議―核兵器禁止条約第1回締約国会議（6月）と第10回核不拡散条約（NPT）再検討会議（8月）が開かれた。締約国会議では禁止条約の意義を強調し、核抑止論について誤りだと断じた「宣言」と、具体化にむけた50項目も「行動計画」が採択された。これらの文書はNPT再検討会議の議論の基調となり、同会議の最終文書案には、核兵器の非人道性に関する多くの記述が残ったものの、核保有国からの圧力によって、核兵器禁止条約の意義に関する記述は盛り込まれることはなかった。今こそ、核兵器を絶対悪と定めた核兵器禁止条約への参加と支持を拡大する必要がある。禁止条約批准国を増やし、国際世論で核兵器国や核依存国を包囲してい

くことに私たちは希望の光を見出すことができる。

禁止条約の参加国は署名92カ国、批准68カ国（23年1月現在）となったが、日本政府は未だに署名・批准に背を向け続けている。このため昨年末、1月22日核兵器禁止条約発効2周年を記念して取り組んだ「日本政府に核禁条約への署名・批准を求める」うたごえ新聞紙上意見広告では、うたごえ空白県も含めた全国47都道府県すべての地域から計4748の個人・団体の「時の声」を集めることができた。短時日にも拘わらず、全国の仲間の連帯と力の集中が貴重な成果を生み出したといえる。うたごえ意見広告と同時に、核廃絶のための1・22全国一斉うたごえアクションでも全国で創意的な運動が取り組まれた。

今年は第2回締約国会議が11月27日〜12月1日、ニューヨークの国連本部で開催される。日本原水協も代表団を送ることとしており、うたごえも、連帯して代表団を送る方向で検討していきたい。

〈無策の政権に医療体制の拡充を求める〉

コロナ禍の第8波に入っても、岸田政権は医療逼迫の危機的状況に対して有効な手立てを打たず無為無策の結果、入院治療ができないまま多くの命が奪われている。自宅での死者数は第6波（22・1〜3）より大幅増加となった776人に上る第7波（22・7〜9）と比較しても、1月に入って急増、1日500人を超え、合計死者数も第7波を超えて共に過去最多を更新している。ここに至って今すぐにも医療体制の拡充が急がれるのに、なお政府は感染者に対しても重症化リスクの低い人は自分で検査し、陽性なら自宅で療養するよう求めている。そればかりか岸田政権は発熱外来の診療報酬の引き下げ、コロナ病床を確保した医療機関への補助金を廃止するなどしているが、政府は、今こそ喫緊の対策として医療体制の拡充を講じるべきである。

〈9条改憲の岸田政権を変える〉

日本では自衛隊に交戦権を認めず「戦力」としないことで、自衛隊の存在は憲法上、ある意味否定されてこなかった。その自衛隊を、いよいよ

よ集团的自衛権の行使、敵基地攻撃能力の保有と言う、米軍の戦争に組み込まれる「戦力」として、憲法で明記して保障しようという岸田政権の常軌を逸した動きが急速に高まっている。今年は「戦争する国づくり」阻止のたたかいの正念場であり、市民と野党の共闘を再構築、発展させるために私たちが持てる力を大いに発揮して、支持率急落の岸田政権を退陣に追い込むことが喫緊の課題となっている。

〈いのちとくらしを守るうたごえを〉

全労連・国民春闘共闘委員会による国民春闘のたたかいが始まっている。小畑雅子全労連議長は「今や大企業の505兆円となった内部留保金を27万円も下がった労働者の賃上げ・雇用拡大に回せ」「暮らしを押しつぶす大軍拡反対、平和憲法守れ」と訴えた。資本金10億円以上の大企業の経常利益は13年度から増大し、21年度はコロナ禍にもかかわらず49・5兆円と過去最高となっている。売上高が停滞するもとでもリストラ等による人件費抑制で利益を生み出し、それを内部留保や金融投資（株式や有価証券）に振り向け、生産的な投資（雇用創出）には向けていない。その結果、日本経済の長期停滞が続き、2021年の日本の一人当たり名目GDPはOECD（経済協力開発機構）で20位まで低下している。いのちとくらしを守るたたかいに連帯し、人々の心にエネルギーの灯をともしうたごえを響かせよう。

〈コロナ禍での文化・芸術支援活動〉

スペイン政府は本年1月、俳優や音楽家など文化を担う労働者が公演と公演の合間に困窮するのを防ぐため、特別な失業保険の創設を決めた（対象者は約7万人）。「このような文化の担い手に失業保険の支援策を整備した国は他にはないはず」とディアス雇用相は強調し、「私たちは文化の労働者のための政府でもある」と表明した。

日本では、コロナ禍での減収補填がない中で多くの芸術家、パフォーマー、舞台従事者らが苦しんでいる。国は保障することも無く、自己責任で文化芸術を担う方々を追い詰めている問題が浮き彫りになっており、

文化芸術分野でも政治を変える必要性が出てきている。

コロナ禍の困難な中、全国では、少ない団体で練習会場が使えない、団員が集まること自体が難しく練習がもてない等の事情から、3年前の2020年の合唱発表会本選は中止となり、一昨年に延期された広島では出場団体数が215であった。しかし、昨年の愛知では271団体となり、ようやくコロナ以前の約290〜300の通常の数字を取り戻しつつある傾向を見せている。今年も感染対策に細心の注意を払い、「なぜ歌うのか」の原点に立ち戻って運動を継続・発展させていく意義ある年にしていく。

2022年度 活動のまとめ

「1」青年のうたごえ

〈方針1〉青年の要求に応えた音楽づくり、青年サークルづくりを積極的にすすめ、青年が主役となれる活動を計画し、次代を担う青年を迎える。

コロナ禍、練習ができたりできなかったりという昨年の状況の中、Zoomの使用など工夫して各地練習を行った。集まれる時は、各協議会企画に各サークルが積極的に参加した。長野、宮城は青年分野から全国合唱発表会に推薦され出場、入賞した。愛媛では県の企画に青年が積極的に関わった。2023年青年のうたごえ祭典開催に向け、実行委員会

にはうたごえ外からも青年が参加し、新たなつながりが進んだ。

青年とつながる活動、「学びの場」、ネットワークづくり
全国指揮・合唱指導講習会、合唱講習会などに青年も積極的に参加してきた。新しく迎えたいメンバー、つながりのある青年の講習会等、参加を強めることが求められる。2023年6月の若者憲法集会に向け、各地の実行委員会に関わる取り組みを強めた。本番に向けさらに積極的に関わっていくことが重要である。

青年のうたごえ交流会と全国うたごえ交流会青年のステージ
青年交流会 in 宮城は、現地参加が多く、リモートと合わせて126名が参加。合唱発表会は19団体、ほとんどが現地での演奏。参加者は愛知の青年とも協力して全国交流会 in 愛知・青年のステージ（愛知48名、全国45名、伴奏、指揮者で97名）で成功につながった。これらの取り組みの中で新たなつながりが生まれたが、団員増にはならなかった。しかし、企画の中心となつて取り組んだ経験は貴重な財産となった。また、同年代の指揮者長江真弥さんの指揮・リードは世代継承の意味でも大きな意義があった。

第5次うたごえ沖縄行動に青年のステージを
青年交流会直前の日程となつて、参加は愛知、長野、兵庫からに留まった。貴重な学びと交流の場として、日程や費用の面等、条件の検討が求められる。

「2」歌をつくり広げる活動

〈方針2〉憲法改悪を許さず、戦争法廃止、辺野古新基地建設阻止、原発停止、核兵器禁止、コロナ感染防止、9条改憲政権に止め「6つの止」実現のため、市民共闘と連帯しながら憲法の心を広める。

〈方針3〉「共に生きる町づくり、地域づくり、職場づくり」のうたごえを活発に広げる。

演奏普及活動

コロナ禍3年目、全国で感染対策を講じながら、演奏普及活動が活発に行われた。核兵器禁止条約発効記念全国うたごえ行動、東日本大震災復興・原発停止、平和行進、メーデー（メーデー・平和歌集普及とあわせて）、憲法集会、平和コンサート等。また、ロシアのウクライナ侵攻、安倍前首相の国葬に、平和、国民民主権、憲法をまもり活かそうと歌を通してアピールした。

ロシアのウクライナ侵攻に、即時停戦、平和を

2月24日のロシア・プーチン政権によるウクライナ侵攻に、全国ですぐに停戦、戦争に反対する行動が取り組まれた。「青い空は」「折り鶴」などスタンダードな歌に加え、「ウクライナ国歌」「ウクライナに平和を」「キエフの鳥の歌」などが歌い広められた。各地の活動からうたごえ新聞では9月までに「ウクライナ侵攻NO!」特集を15回組んだ。中でも、三多摩青年合唱団（東京）は団練習の前にほぼ毎週最寄り駅でスタンディングを続け、ウクライナ出身のオペラ歌手オクサーナ・ステパニユックさんと出会い、団演奏会にゲスト出演が実現した。また、ウクライナに止血帯を送る活動にも取り組んだ。絹の道合唱団（東京）は「八王子NO WAR!」など、各地で市民との共同行動に参加した。埼玉、長野他で支援連帯のコンサートを行った。

憲法改悪・戦争法廃止

憲法記念日はじめ憲法集会での演奏。千葉は「その手の中に」、福井では「もしあなたがここにいれば」、福岡・北九州は9条まつりで「イメージン」、京都では憲法ウォークで「憲法九条五月晴れ」等、各地で「日本国憲法第9条」「わたしを褒めてください」なども歌われた。

核兵器禁止

唯一の戦争被爆国日本の政府に、核兵器禁止条約署名・批准を求める署名活動とあわせて活動。禁止条約2周年1月22日は全国一斉にうた

ごえアクションが展開された。昨年にひきつづき、大阪のうたごえは記念講演にアーサー・ビナードさんを迎え、合同演奏とで「2周年のつどい」を開催した。

原水爆禁止世界大会では、ヒロシマデー集会とナガサキデー集会での文化特別企画を広島、長崎のうたごえが担当。広島では「うたごえとヒバクシャと若い平和活動家」で構成し、「雲に人間を殺させるな」を演奏。ドキュメンタリー映画制作に取り組んだ学生、カクワカ広島（核政策を知りたい広島若者有権者の会）からの発言。長崎は、被爆者渡辺千恵子さんの半生を綴った合唱構成「平和の旅へ」から「ボタンの向こうは冬」他と、中学生と2カ所の学童保育を映像でつないで「約束のうた」を演奏。また、長崎のうたごえは37年歌い続けてきた「平和の旅へ」のDVDを第1回締約国会議（ウィーン）の各国代表に届けた。

原水協とタイアップして6・9行動や平和アピール活動で流す「今月の平和のうた」音源は東京から始めて各地でリレーして送った。

沖縄辺野古新基地建設阻止

辺野古新基地反対第5次沖縄行動は全国から34名が参加した。3日間の日程で前泊博盛沖縄国際大学教授の講演による学習会、コンサート（沖縄と全国のうたごえで、芝憲子作詩・池辺晋一郎作曲合唱組曲『沖縄は叫ぶ』沖縄初演、25名で参加したちばりよー沖縄合唱団は創作曲『ちむぐりさ』を、全国合同は『HEIWAの鐘』を演奏）、辺野古での抗議行動。

大行動（今年度方針から青年の多数参加）は日程、コロナ禍等で叶わなかったが、体験、沖縄で聴く「沖縄は叫ぶ」等、参加者の力になった。

ちばりよー沖縄合唱団の創作と演奏活動、三重のうたごえの連帯コンサートなどが続けられた。

創作活動

全国創作講習会 in 福島（郡山市）はオンラインも含め59名参加。オプショナルツアーで、原発事故から11年の現状を学んだ。喜多方市出

身のシンガーソングライター山本さとしさんの講演では、「うた創りは動機から」と創作にかける想いをギター弾き語りで提示、参加者を鼓舞した。オンラインでも実作参加、21曲発表。初めてのハイブリッド開催は、配信スタッフの連携と技量の高さ、郡山合唱団の配慮にも助けられ、貴重な講習会となった。

講習会后、練り上げるためのオンライン創作発表会（7月）を行った（35名参加、32曲発表）。参加者は5月と合わせ94名。オンライン活用で創作活動の裾野は広がった。

オリジナルコンサートは41曲、うち4曲（昨年度は12曲）が映像参加。初めて講評委員をされた方から「大変な創造意欲」「生活から離れたことでも、痛みとして敏感に取り上げている」「素晴らしいソングブック」。武義和さんは「レベルアップし、専門家にはない型破りの面白い音楽、普遍的な人の愛や悲しみを歌った歌も良いものがたくさん、珠玉の作品も」と評。また、故小林康浩さんの後を継ぐ南部大地さんにも注目が集まった。

3年前にたちあげた全国創作センターによる作曲募集も全国の創作運動を励ましている。

特徴的な運動3点。保育のうたごえは、4回連続のリモート創作講習会で、20人が参加、7曲が生まれた。保育運動に伝える「もう一人行進曲」は保育運動の中でも注目を集めた（2023祭典in北海道、演奏曲予定）。

ロシアのウクライナ侵攻を受けて3月5日、きむらいずみさんが詞「ウクライナに平和を」を提供、作曲を呼びかけ、全国で短期間に多くの曲がつけられ歌われた。

福島原発事故10年に福島の今を伝えようと愛知子ども幸せと平和を願う合唱団が創作したミュージカル「バックトゥザ・フーちゃんII」は「うたごえ運動のSDGs」として、運動を次の世代につなぐ典型となっている。

「3」合唱発表会運動、地域・分野のうたごえ祭典

〈方針4〉合唱発表会を地方、産別、全国とも活発にし、学び合い、創造の高まりをめざす

〈方針5〉地方祭典の全都道府県の開催をめざし、日本のうたごえ祭典の長期開催計画を持つ

合唱発表会

全国的に感染対策をしながらも徐々に合唱発表会開催を検討、実行する方向をとった。が、感染状況に対する行政・職場・地域の対応のばらつきなどで開催できなかった県、また、開催はしたが参加団体、人数が少ないなど困難を抱えた県、産別もあった。結果として、各県、産別での合唱発表会は、全国で26都府県、1ブロック、5産別、1階層で開催。全国合唱発表会は本選枠を19年度実績として、合唱発表会、オリジナルコンサートに271団体が参加。

各予選、本選ともマスク等の制限による表現の困難さはあるものの、参加状況は以前の状態をほぼ取り戻し、演奏の質の高まりも見せている。一方で演奏人数が少なくなっている。演奏上の課題としては、あらためて個々の基礎力、聴きあう力、表現の幅、音楽を届ける力などが問われている。また、若い人を合唱団に迎える努力、一緒に演奏する工夫、今後につなげる大切さも強調された。当面は演奏時のマスク着用を徹底する必要もあらためて確認された。運営上の課題では人数、要員が不足し、支障をきたす一面もあった。出演団体の理解と協力とともに、適切な要員配置と専門化の検討などが課題。新しい団体に積極的に呼びかけ、豊かな交流ができる合唱発表会をつくる、未開催県の開催計画を持つことが課題である。

地方祭典、産別祭典

県、ブロック祭典の開催は、コロナ禍の影響を受けながらも徐々に回復を見せている。北海道は旭川で3年ぶりに開催、兵庫は加古川で6年ぶりに開催、広島は台風のため中止となり、2023年に同企画で延期

開催。長野（信濃のうたごえ祭典）は地域合同で演奏、佐賀は20名の若者のステージを実現、今後につなげた。

地域祭典では東京・足立の祭典を3年ぶりに39回目を開催。

産別では、国鉄（大阪）、自治体（京都）、電通（兵庫）、医療（京都、オンライン）で開催地のうたごえと協力して開催し、それぞれ産別の存在を示した。

全国交流会 in 愛知

日本のうたごえ全国合唱発表会に合わせて、「うたいだそう！もういちど！」を合言葉に、12月5日、特別音楽会Peace Wingを、4日には小音楽会でミュージカル「バックトゥザ・フーちゃんII」を上演。2つの音楽会は共に愛知のうたごえの総力をあげて行われ、その創造的蓄積も随所に顕れ、合唱を主体とした豊かな交流会が展開された。また、音楽的なつながりと拡がりも特別出演名古屋市立志賀中学校合唱部、合唱組曲「銀色の翼にのせて」初演などに示され、青年ステージへの鮮やかな演奏の協力も実現し、今後に期待の持てる全国交流会となった。

2023年以後の日本のうたごえ祭典計画

2023年は、「うたごえ運動75周年記念2023日本のうたごえ祭典in北海道」を8月25日から27日に開催。25日は札幌芸術の森野外ステージで野外フェスティバル「大地のうた」、26日は札幌文化芸術劇場hitaruで特別音楽会I「平和に向って」、特別音楽会II「スタートライン」を行う。

2024年は「日本のうたごえ祭典inさが」を11月29日～12月1日。2025年は「日本のうたごえ祭典in神戸・ひょうご」を11月22～24日に開催。それぞれ準備が始まっている。

2026年以降は、2028年運動80周年日本のうたごえ祭典東京開催を軸に、26年長野、27年大阪等、祭典プロジェクトで提案、検討に入っている。

「4」うたごえ新聞・季刊「日本のうたごえ」

〈方針6〉「うたごえ発ジャーナル」としてのうたごえ新聞をいっそう輝かせ、歌の広がりと共に読者を常に意識的に広げる

「日本国憲法をまもり活かし、核も基地もない平和な日本を、運動の未来を創る青年と世代を超えて絆を深める」を柱に編集。合わせて〈読み・作り（通信・企画提案）・広げる（読者拡大）〉の活動を進めた。

2022年、沖縄復帰50年。新年号の玉城デニー沖縄県知事からの寄稿、古謝美佐子さんをはじめ、遺骨収集を続ける具志堅隆松氏、風刺とユーモアで世相を斬るせやろがいおじさん、気候危機・平和を訴える環境活動家・武本匡弘氏、落語家桂吉弥氏、合唱指揮者山本高栄氏、絵本作家長谷川義史氏等幅広い分野の識者・諸運動からインタビュー、寄稿を紹介。中でも戦争の遺物で両目両手を失う苦闘の中、盲学校教師になった藤野高明氏の「人生とうたごえ」は大きな反響を呼んだ。2023年新年号は北海道での日本のうたごえ祭典成功へ特集。

ロシアのウクライナ侵攻で、ロシアの歌を愛する多くの人々の複雑な想いと底にある歌本来の力を伝えたナターシャ・グジー、岸本力両氏、合唱団白樺の寄稿。「戦争が終わっても戦争は終わらない」写真家大石芳野さんら。

〈作り〉

改憲阻止、核兵器廃絶へ、演奏普及、創造、青年ズームアップ、国際交流（日韓）、郷土芸能等の寄稿・通信。全国からの機関紙誌から活動が豊かに交流された。年間通信数1120通（機関紙誌、作曲含。前年1078）。

年間を通じて精力的に送稿の藤村記一郎さん（愛知）、箱崎作次さん（東京）。藤村さんは2022年全国交流会in愛知への取り組み、同小音楽会で上演の「バックトゥザ・フーちゃんII」福島公演等多岐に渡り、掲載数23件。箱崎さんはウクライナ支援活動とウクライナの歌手オクサーナ

さん（インタビュー企画実現）、曲づくりと読者拡大通信で掲載17件。齋藤一正さん、鈴木勝雄さん（東京）、河野好行さん（神奈川）も掲載1件。河野さんは作曲家長森かおるさん、ピアノ調律師の平原淳年氏への取材送稿も。

499件送稿の機関紙誌。中でも北海道合唱団「マルチャ」、福井センター合唱団「竜頭蛇尾」、関西合唱団「くれっせんど」は構成員の総力で企画・編集され、活動が届けられた。

〈広げる〉

今年度読者拡大は全国で509人。5月に組織活動者会議を開催（愛知）、「加盟団体の全員購読」を提起。しかし、申請部数との関係で大幅減紙もあり、総会基数を下回ったことから、「加盟団体一人の申請増」を提起。県拡大目標達成府県は、山形、静岡、福井、滋賀、和歌山、大阪、高知、佐賀、長崎。年間の総会基数比十は、佐賀25、神奈川16、兵庫6、大阪5、島根3他5県が続く。

大阪、東京、愛知ではニュースを定期的に発行し、毎月の協議会会議で現状と実践の交流が行われている。大阪の減紙を越える拡大で申請増、佐賀も2024年日本のうたごえ祭典に向け、増。島根も協議会発足から拡大が進んでいる。

多くの機関紙誌に「うた新コーナー」が設けられ、佐賀では2024祭典を見据え、うたごえ新聞拡大委員会を発足。東京のうたごえは毎週の「うた新增列車」で、読者拡大情報と常任委員執筆の読みどころを掲載し、拡大を促進している。

季刊「日本のうたごえ」

No.195～198を発行。No.195は「2021日本のうたごえ祭典inひろしま」特集。コロナ禍1年延期し開催、オンラインを駆使した音楽づくり等。合唱発表会演奏批評座談会テーマは「聴く力」。No.195「憲法施行75周年 2022年全国総会特集」。総会全発言と憲法学者志田陽子氏の記念講演「表現の自由2022～表現者のパワーと責任を立て

なおう」。歌から憲法が語られた。

No.197「うたごえ75周年記念 6人の音楽家によるオムニバス作品集『スタートライン』」特集。シンポジウムでの作曲者の曲に込めた思い、運動への期待を読み深め、演奏に活かしたい。

No.198は「ロシアによる戦争とおびやかされる音楽の自由」（小村公次氏）。ロシアのウクライナ侵攻下、「音楽の世界でいま、なにが起こっているか」。作曲家ヴァレンティン・シルヴェストロフはウクライナからドイツへの避難の途で作曲。戦争下でのウクライナと世界の音楽家たちの行動（演奏はYouTubeで）とメッセージを伝えるこの号は反響も多く、愛知、東京でも続く講演会が企画された。

他、月号好評連載（石黒真知子『ポエム&エッセイ』）、楽譜紹介（伴奏譜付）など運動づくりの貴重な資料となる本誌の普及が急がれる。

「5」学習・教育活動

〈方針7〉演奏・創造・普及活動を旺盛に展開する中で、運動の歴史に学び、運動の理念を受けつぎ発展させる学習・教育活動をすすめる、次代を担うリーダーが育つ環境づくりを計画的にすすめる。

コロナ禍の中、徐々に回復を見せているが、未だその影響は大きく苦心の活動が続いている。こうした中、全国合唱発表会本選をほぼ例年通り行うことができた。感染リスクを受け止めながらも、工夫、模索をして運動を展開し、演奏会開催、練習会、地域合唱発表会等全国で活動が続けられた。

各地の主な教育活動

愛知では、全国交流会に向けて取り組まれた合唱組曲「銀色の翼にのせて」の初演を成功させるべく作曲者を招いての（まなぼ企画）で演奏成功の大きな力になった。大阪では関西合唱団が「うたごえは生きる力」「うたごえ運動の創造と展望」をテキストに団内学習会を開催。大阪の

うたごえ協議会と共催で新実徳英氏を講師に日曜講座を開催。その他、「講演会と音楽のつどい」が行われた。

京都では、京都のうたごえ75周年学びPJ『奇跡のような：私たちの軌跡をたどる』第2弾を開催。1980年代以降の京都の活動やエピソードを学習、その歌を歌い交わした。青年からの強い要望を受けて山本高栄合唱講座を開催、楽しい声楽講座、楽譜の読み方、曲の創られた時代や人物を掘り下げた合唱講座など楽しく充実した内容になった。

その他、東京では、全国交流会全国合同参加の練習会に山本高栄氏を迎え行われた。長野では県うたごえ学校夏の講座を開催。75周年記念曲の合唱練習と合わせて、参加団体の演奏を企画してコロナ禍の中の励みとした。

講習会

合唱講習会は5月に西日本、中日本、東日本で合唱講習会を行った。

西日本は佐賀市で開催し、(97名の参加、佐賀32名、九州74名)

2024年日本のうたごえ祭典佐賀開催に向けて、福岡、長崎、広島の応援など連帯して開催。発声講座に地元から松本康男氏、合唱講座には福岡から中島敬介氏、運動内から渡辺享則、高田龍治など、各々の持ち味が発揮され充実した内容になった。「2024年日うたへの登山がいよいよ始まった！」と実感する活気ある講習会となった。

中日本は愛知で開催。東海ブロックから100名、北海道からの参加も含め、全体で140名で行われた。運動75年記念作品「スタートライン」から「すこしずつ」の作者者信長貴富氏の指導、全国で大活躍の山本高栄氏、愛知「まなぼ企画」で大好評の永ひろこ氏など魅力的な内容、全国交流会in愛知特別音楽会で歌われる全国合同曲、また地元企画としての合唱組曲「銀色の翼にのせて」からなど音楽会のイメージが膨らむ講習会となった。

東日本は東京と神奈川で開催。ここにも北海道からの参加を含め108名が参加。講習曲は前年につづき「平和のたね」と75周年記念作品。講師陣も前年に引き続きの間谷勇氏に加え、山本高栄氏、赤坂有紀氏、運

動内から渡辺享則を招き、東京、神奈川の2カ所での開催も参加者を広げ、新鮮で充実した内容となった。

全国指揮・合唱指導講習会(教育講習会)は6月、長野・松本市あがたの森文化会館に72名の参加で行われた。全国が参加対象となる本講習会もコロナ禍の影響を大きく受けた。距離、マスクなどの感染対策の中で日々の練習に直面する指揮者、指導者にとって、自らの課題と音楽づくりに集中するこの講習会は、厳しい環境だからこそ求められ、必要とされている。

発声講座、受講者に合わせたコース別指揮法講座、合唱講座、特別指揮講座、など内容は例年同じだが、常連参加者、初参加者、合唱隊参加者も含めて、満足度の高い講習会となった。加えて広島から特別講師として3年越しに招いた寺沢希氏は緻密な合唱指導で好評であった。参加者の理解力が高まってきたという感想の一方、さらに期待に応える指導の向上が急務であることが強調された。

また、理論講座として「全国の青年が今何を求めているか！」をテーマに若手の活動の様子を交流した。運動の高齢化の中、関心の高さは明白で、次代に引き継ぐ課題として更に研究が急務である。

日本のうたごえ合唱団2022は1月8〜10日、大阪で新春練習会を行い、95名でスタートした。新作「始まりの音」は作詞の石黒真知子さんのお話を含め、戦争への警鐘を鳴らすべく合唱作品として深められた。コロナ禍の影響は否めないが、夏の練習会を経て、全国交流会in愛知で80名で演奏をし存在感を示した。

次代を担うリーダーの育成

青年の活動を前面に押し出すべく、第5次沖繩行動、青年交流会in宮城、全国交流会in愛知での青年のステージを重視、青年座談会では運動を次代に引き継ぐ活動が意識された。特に全国交流会は脚光を浴び、その成果を生かすことが求められる。

また、佐賀のうたごえ祭典でも若者のステージが話題を呼んだ。世代

交代を進めていく上で新たに運動の担い手をどう作り出していくか、講習会への意識的な送り出し、団内、協議会での論議、他団体との交流等、その必要性、協同があらためて求められている。

〔6〕組織建設連帯活動

〔方針8〕サークル・合唱団をつくり、合唱団員を増やす。合唱発表会参加団体、協議会加盟団体、うたごえ新聞、季刊「日本のうたごえ」読者拡大、加盟団体を500に、協議会のない県での協議会確立をめざす。

今年度新加盟は、大阪3、埼玉2、京都2、北海道1、愛知1、岐阜1、福岡1の11団体。これらは加盟団体の会員が地域にサークルをつくり、会員を増やし、活動を広げ合唱発表会運動の中で培ってきたつながり等、「うたごえにお世話になっているから」と加盟。サークルづくりは組織建設の要。岐阜のリカンターレはコロナ禍で活動休止とした団体の代表が新しくサークルを立ち上げ、加盟となった。北海道の女声コーラス・コーシカは北海道での全国祭典を成功させようとの呼びかけに加盟を決定。一方、コロナ禍の中で活動を休止した団体や、長く活動休止中の団体の退会も少なからずあった。(加盟団体は468)

コロナ禍で休止していた練習の再開や演奏会の取り組みの中で、新会員を迎えた団体も多かった。一方、コロナ禍の中で復帰できない、会員の高齢化など全体的にはまだ会員減少の傾向にある。この対策は喫緊の課題である。

ブロック活動では、関東、関西は、ブロック会議を定期的にもち、合唱講習会の成功などに力を尽くしている。東北ブロックもオンラインで定期的に各県代表者会議を開催している。

職場のうたごえは、現役が少なくなり、活動休止となり退会する団体もある。いかにうたごえを広げ、継承するかが大きな課題となっている。

〔7〕事業・普及活動

〔方針9〕うたごえ事業出版物を多くの人々に広める制作と普及、事業活動を旺盛に展開。普及、教育・学習の財産としてのうたごえ出版物をみんなのものにし、魅力ある企画制作と旺盛な普及でうたごえの前進の力とする。

メーデー歌集

引き続きコロナ禍の下ではあったが、前年度よりも出店できる機会が増えた。メーデーもハイブリット開催をするところが増えてきた。メーデー歌集の出版については当初見送る方向であったが、ロシアによるウクライナ侵攻により「メーデー／平和歌集」として緊急発売し、街頭行動などでも活用した。ウクライナ出身のナターシャ・グジーさんのCDやコンサートも「文化で平和を」の思いを込め取り組んだ。「スタートライン」普及の取り組みも、事業普及部会で交流し各地の経験を力とした。各地の経験を全国に広めるためにも、うたごえの出版物として全国発信ができる出版方法の検討、同時に著作権協会への届け出順守の啓蒙も必要。

オンラインを活用しての事業普及部会も月1回開催が定着し、そこでの普及経験交流が力となった。今年度から2023祭典を見据え、北海道からも参加。

楽譜のネット配信などインターネットを活用した新たな層への普及では、音楽センター出版のCD、楽譜のダウンロード販売はシステムの都合により中断中。新たな方法を準備している。音楽センターYouTubeチャンネルの活用も進めたい。

〔8〕郷土のうたと踊り

〔方針10〕郷土のうたと踊りの活動を旺盛に展開し、専門家との協力協同、全国講習会の充実、全国活動交流を活発にする

講習会

東西で講習会等行事を開催した。西日本は、5月に加藤木朗氏を講師に「和太鼓・はないちもんめ」、塩原良氏を講師に「吉祥開運長熊手踊り」で開催し、38名が参加。11月の兵庫のうたごえ祭典 in 加古川の全県郷土合同につないだ。

東日本は、6月に特別企画として「三宅島・神着木遣太鼓を学ぶ会」を開催、30名が参加して成功させ、9月の東京・関東での「江戸やっこまつり」（31団体450名の参加）第25回につないだ。

東海太鼓センターは「江戸壽獅子」で全国交流会 in 愛知・特別音楽会でオープニング演奏。神戸市役所センター合唱団太鼓衆団輪田鼓は和太鼓・民舞20教室による発表会を8月と12月に開催。西播センター合唱団民謡集団「鯨」も教室生修了演奏会と団創立60周年記念コンサートで演奏。調布伯江合唱団郷土部「跳鼓舞」は特別支援学校太鼓鑑賞会等で演奏。静岡合唱団なかま郷土部は30周年静岡太鼓フェスティバルに出演。東日本郷土実行委員会が被災地へ和太鼓演奏交流ツアーを実施。こうした活動の中で専門家との協力協同が進んだ。

「全国郷土センター（仮称）」ネットワーキングづくりでは、全国郷土部のLineグループで経験、情報交換が進んだ。

〔9〕専門家及び専門団体との協働連帯活動

〈方針11〉 専門家及び専門団体との協力協同を強め、音楽文化の豊かな発展をめざす

各項目でのまとめ参照。

〔10〕国際交流

方針（12）アジアをはじめ世界の音楽家、音楽団体との国際交流の輪をさらに広げる計画をもつ。日本のうたごえ75周年記念事業の一環

として日韓音楽交流25周年交流を計画する。

韓国との交流では、5月と7月、オンラインで交流を行い、7月には13団体が参加。その様子をYouTubeでも配信した。愛知ではミャンマー人民支援連帯として、抵抗歌の日本語訳詞や学習会に取り組んでいる。また、2年前に名古屋入管で命を落としたスリランカ人のウイシユマさんのことを、その命日に演劇や歌で表現する運動も広がっている。

〔11〕75周年記念事業

方針（13）10からなる75周年記念事業委員会の記念事業計画を遂行する。

日本を代表する6人の作曲家に新曲を委嘱し、4月の第55回全国総会にあわせ、うたごえ創立75周年記念く6人の音楽家による作品集「スタートライン」を出版。総会后、作曲家各氏を迎えて記念シンポジウム&初披露―栗山文昭氏・栗友会合唱団の出演も得て6曲を演奏―を行った（200名参加）。

核兵器禁止条約発効2周年に合わせ、「日本政府に署名・批准を求める」うたごえ新聞意見広告を取り組み、47都道府県すべてから4748口が寄せられた。75周年記念事業の財政基盤も確立した。

現在と未来のために軍事大国の道を許さず、
列島で平和のうたごえを響かせましょう！
—運動75周年をバネに会員とうたごえ新聞
読者を増やす 一大運動を創ろう

2023年・活動方針

方針〈1〉青年の要求に応えた音楽づくり、青年サークルづくりを積極的にすすめ、青年が主役となれる活動を計画し、次代を担う青年を迎える。

①サークル・合唱団・協議会で、青年・学生とつながる活動や「学びの場」を意識的に持つ。

②仲間やサークルづくりへ、団体・分野を越えたネットワークづくりを強める。

③「2023全国青年のうたごえ祭典in愛媛」を青年のうたごえを活性化する場として、全国から青年を積極的に送り出し、「2023日本のうたごえ祭典in北海道」につなげる。

方針〈2〉大軍拡を許さず、戦争法廃止、辺野古新基地建設阻止、原発停止、核兵器禁止、コロナ感染防止、9条改憲政権に止（とど）めの「6つの止」実現のため市民共闘と連帯しながら憲法のこころを歌や音楽で広めよう。

①全国署名を旺盛に広げよう。

・「9条改憲NO！全国市民アクション」が呼びかけた「憲法改悪を許さない全国署名」を全国で取り組む。

・オール沖縄会議の、辺野古新基地建設の断念を求める初の「国会請願

署名」の運動に連帯し、沖縄の揺るがぬ新基地ノーの民意を圧倒的多数の署名で示そう。

・「日本政府に核兵器禁止条約の署名・批准を求める署名」を全国で広め強めていく。〃6・9行動〃はじめ全国各地で街頭宣伝等を行い歌や音楽で核兵器廃絶をアピールする。

・岸田政権がねらう大軍拡・大増税に反対する「平和、いのち、くらしを壊す大軍拡、大増税に反対する請願署名」に取り組む。

②「戦争法に終止符を！音楽人・団体の会」事務局体制の強化を図りながら今後の活動のあり方について検討していく。

③辺野古新基地建設を断念させる沖縄県民のたたかいに連帯して、「沖縄を返せ！うたごえ大行動本部」を軸に沖縄支援の取り組みを強めるとともに「沖縄を返せ！うたごえ基金」に取り組む。

・創作曲や替え歌作りで連帯し、支援の輪を広げる。

④11月末に開かれる核兵器禁止条約第2回締約国会議の成功とともに、日本原水協とも調整しながら、運動づくりを検討する。

⑤本年12年を迎える東日本大震災被災地の復興・再生への支援を継続し、全ての原発の再稼働を許さず原発ゼロの社会をめざす歌をつくり支援の輪を広げる。

⑥昨年は、沖縄をはじめ米軍基地での米兵の自由な往来が感染爆発の原因となった。引き続き地位協定の抜本的な改定を強く求めていく。

⑦コロナ禍の下、でき得る感染防止対策を講じながらサークル・合唱活動を進めよう。

方針〈3〉〃共に生きる町づくり、地域づくり・職場づくり〃のうたごえを活発に広げる。

①合唱・器楽・和太鼓・民舞等多種多様な形態でうたごえを広げ、平和で健康なうたを普及する。

・全市区町村（1741）で多彩なうたごえ活動を展開し、創り歌を広げる普及活動を旺盛に展開する。

・全てのサークル・合唱団は職場にうたごえを届けサークルづくりの計画をもって実践する。

② 全国で平和コンサートや地域原水協とも協力共同して平和うたう会等を開催し、平和行進、世界大会につなげていく。

③ みんなで創り歌う運動を広げ、新しい創り手を生み出し創作活動と作品交流を活発にする。

・「全国創作センター」の周知徹底ならびに創作活動の旺盛な展開を図る。

・全国創作講習会を誰もが参加できる内容で成功させるとともに、全国各地でも講習会を開催する。

方針〈4〉合唱発表会を地方、産別、全国とも活発にし、学びあい、創造の高まりをめざす。

① 合唱発表会を協議会活動の年間活動の柱に据え、演奏を聴き合い、講評を通じて交流し、学び合う合唱発表会の原点をいっそう輝かせる。

② 参加団体を積極的に呼びかけるとともに、運営に工夫を凝らして豊かな交流ができる合唱発表会をつくる。

③ 合唱発表会参加団体を1600団体に、未開催県の今年度開催計画を持つ。

④ 合唱発表会をより充実させるために実施要領について小委員会をはじめとした検討を持つ。

方針〈5〉地方祭典の全都道府県開催をめざし、日本のうたごえ祭典の長期開催計画を持つ。

① うたごえを起こし、つながりを広げ、新たな発展をめざす「うたごえ祭典」の役割を輝かせ、地域や都道府県単位、産業別・階層別の祭典開催や交流を活発にし、祭典運動の前進をめざす。

② 「うたごえ運動75周年2023日本のうたごえ祭典in北海道」を

地元、全国の連帯で成功させる。

・2024年日本のうたごえ祭典を佐賀で11月29日〜12月1日に開催する。

・2025年阪神淡路大震災30年、非核神戸方式制定50年、被爆・敗戦80年の節目として日本のうたごえ祭典を兵庫で11月22日〜11月24日に開催する。

③ 祭典プロジェクトで26年以降28年の運動80周年を視野に入れた開催計画を具体化する。

方針〈6〉運動の魅力と人間的魅力が満載されている、「うたごえ発ジャーナル」としてのうたごえ新聞をいっそう輝かせ、歌の広がりとともに読者を常に意識的に広げる。

① 「読み、作り、広げる」を合言葉に、紙面の中からたくさんの運動財産を学び、創造、組織、普及の力にし、2023年目標に据えた各県の計画、方針を具体化する。

過去最高時の読者数をめざす。

② 規模の大小を問わず「うた新フォーラム」などの全国展開を計画する。

③ 通信活動を活発にし、全国の活動経験を学びあう。

④ 季刊「日本のうたごえ」は、運動づくりのテキストとしての位置づけを高め、積極的に活用し、会員の全員購読をめざす。新読者を500人増やす。

方針〈7〉演奏・創造・普及活動を旺盛に展開する中で、運動の歴史に学び、運動の理念を受けつぎ発展させる学習・教育活動をすすめる、次代を担うリーダーが育つ環境づくりを計画的にすすめる。

① 運動の歴史を引き継ぎ、日常の練習や活動の中で教育活動を重視する。批評活動や運動の理論学習をすすめる前進の力にしていく。

・うたごえ新聞、季刊「日本のうたごえ」、「グレート・ラブ」、「うたごえは生きる力」、対談集「池辺晋一郎の夢を見てますか」などを学習・教育活動に積極的に活用する。

② 6人の音楽家による75周年記念作品の作品集を全国合唱講習会はじめ、運動内外にわたり普及するとともに演奏の機会を積極的にもつ。

③ 1996年以降改訂されていない「教育テキスト」の発行を検討する。

④ 各種全国講習会へのサークル・合唱団からの参加を強める。各協会やブロック等で指揮者・指導者の交流を活発にし、そのネットワークづくりをすすめる。

⑤ 普及活動を旺盛に推し進めるため、オンライン、SNSを活用した取り組みを進め、新たな層へのうたごえ普及の力にする。

⑥ サークル・合唱団・協会の次代を担うリーダーづくりの計画をもつ。

⑦ 日本のうたごえ祭典の全国合同企画、「日本のうたごえ合唱団」への参加を強め、創造的連帯の前進をめざす。

方針〈8〉サークル・合唱団をつくるとともに協議会への加盟をよびかけ、うたごえ協議会の強化と建設をすすめる。空白県をなくすために、サークル加盟を積極的におしすすめる。地域ブロックの連帯活動を活発にする。

① サークル・合唱団を新しくつくり、サークル・合唱団員を増やす。

② 合唱発表会参加団体及び人数、協議会加盟団体を目標を持って計画的に増やしていく。加盟団体500団体をめざす。

③ 協議会のない県の発足を計画を持ってすすめる。現在2団体が活動の地域は今年度中の協議会結成をめざす。

④ 職場のうたごえの建設強化をはかる。

⑤ 2023年の全国組織活動・うたごえ新聞読者拡大会議を4月に愛知で開催する。

方針〈9〉うたごえ事業出版物を多くの人々に広める制作と普及、事業活動を旺盛に展開しよう。

① 普及、教育・学習の財産としてのうたごえ出版物をみんなのものにし、魅力ある企画制作と旺盛な普及でうたごえの前進の力とする。

② 6人の音楽家による75周年記念作品集「スタートライン」を講習会や祭典で位置づけ、歌うこととリンクして普及する。

③ 「メーデー／平和歌集」など楽譜、文献、CDなどを活用し、多くの人

にうたごえを届け、闘いの大きなうねりをつくる。

④ みんなうたう会、うたごえ喫茶の活性化やうたごえ普及のために、出版物の活用や普及に努める。

⑤ サークル・合唱団の演奏活動と結んだCD、楽譜などを出版し普及する。

⑥ 全ての協議会加盟団体で事業活動が取り組めるよう事業部担当をおき、経験を交流し合い事業普及活動を活発に進める。

⑦ 楽譜のネット配信など、インターネットの活用などで事業普及の力にする。

方針〈10〉「郷土のうたと踊り」を旺盛に展開し、専門家との協同、全国講習会の充実、全国の活動の経験交流などを活発にする。

① 東西郷土講習会を成功させる。

② 全国の郷土活動、経験交流などを活発にし、情報をうたごえ新聞に反映させる。

③ 専門家・保存会との協力関係をすすめる。

④ 「全国郷土センター（仮称）」ネットワークづくりを検討する。

方針〈11〉専門家及び他団体との情報交流、協力共同により音楽文化の豊かな発展をめざそう。

①東・西日本での合唱講習会を成功させる。

・各種合唱講習会、指揮者・指導者講習会など運動内外の専門家との協力協同をはかり、うたごえの創造的力量的量を高める。

②平和・民主団体との交流、協同を強める。

方針（12）アジアをはじめ世界の音楽家、音楽団体との国際交流の輪をさらに広げる計画をもつ。

日本のうたごえ75周年記念事業の一環として日韓音楽交流25周年となる本年に交流イベントをリアル又はオンラインで計画する。

方針（13）10からなる75周年記念事業委員会の記念事業計画を遂行する。

おわりに

ロシアのウクライナ侵攻で、両軍はこれまでにそれぞれ約10万人の死傷者を出している（昨年11月米軍トップ公表）。

あのアジア太平洋戦争によって310万人の日本人が亡くなったが、当時世界で最大の犠牲を出したのがソビエト連邦。その理由は独裁者スターリンの戦争指導に原因があると言われている。勝てるまで人命も装備も前線に突っ込むよう教育され、時には内部兵士にも粛正をかけ、人命より目的達成のドクトリンが徹底され、イデオロギーをかけた戦争勝

利への執着、相手の全存在を消し去るのが目的であった。敗北はソ連の終焉を意味しており、この戦争で次から次へと市民も巻き込んで戦力に投入した結果、2700万人を超える未曾有の犠牲を出した。

そのソ連の独裁指導者と、現在、ウクライナ侵略を正当化して、民間人を戦争に動員できる「部分的動員令」を出し、兵力を150万人に増強して、あくまでも侵略戦争を続ける姿勢を露わにしたロシア大統領の独裁的人物像が重なる。

そして、さらには独裁者ならずとも、民主主義の根幹である国の在り方を論ずる国会、憲法を無視して大軍拡に走ろうとしている日本の岸田政権の実態とも見事に重なるのである。コロナ禍の下でも、私たちが一日一日を命の危険にさらされることもなく平穏に暮らしているのは、日本が戦闘状態になっていないからである。

「真の平和とは単に戦争がない状態でなく、戦争ができないシステムが完全に保障されていることをいう」（森村誠一）。「歌ったということだけで客観的な状況が変わるわけではないが、それを変えようとするとき、一緒に肩を組み、手をつなぎ合おうと、みんなの心を一つにするために音楽は絶対的な力を発揮する」（池辺晋一郎）。

今年、私たちは今までにない日本の運命を大きく左右する歴史的な岐路に立っている。「軍事国家づくり」を阻止できる年にするため、私たちは歌や音楽で、市民とも連帯しながら、今年も一年、大いにうたごえ運動を推し進めていこうではありませんか。

◆2023年主な日程・予定

◎2023年うたごえの主な日程

日本のうたごえ祭典 in 北海道	8 / 25 (金)	～	8 / 27 (日)
東日本合唱講習会	5 / 13 (土)	～	5 / 14 (日)
東日本郷土講習会	4 / 22 (土)	～	4 / 23 (日)
西日本合唱講習会	5 / 6 (土)	～	5 / 7 (日)
西日本郷土講習会	4 / 29 (土)	～	4 / 30 (日)
全国指揮・合唱指導講習会	4 / 14 (金)	～	4 / 16 (日)
全国創作講習会 in 佐賀	11 / 11 (土)	～	11 / 12 (日)

◆2022年度表彰団体・個人一覽

表彰団体

【全国協・年間優秀団体】

☆最優秀団体

- 愛知のうたごえ協議会 (愛知)

☆優秀団体

- 大阪のうたごえ協議会 (大阪)
- 佐賀のうたごえ協議会 (佐賀)
- 愛知子どもの幸せと平和を願う合唱団 (愛知)

【うたごえ新聞】

☆ブルーペン賞

- 藤村記一郎 (愛知・愛知子どもの幸せと平和を願う合唱団)

☆編集協力賞

- 箱崎作次 (東京・三多摩青年合唱団、三多摩教職員合唱団)

☆通信賞

- 石垣就子 (宮城・コンブリオ)
- 河野好行 (神奈川・神奈川合唱団)
- 北林亜弓 (大阪・関西合唱団)
- 斎藤一正 (東京・みなど合唱団)
- 鈴木勝雄 (東京・調布狛江合唱団)

☆機関紙誌賞

- 「マルチャ」(北海道・北海道合唱団)
- 「竜頭蛇尾」(福井・福井センター合唱団)
- 「くれっせんど」(大阪・関西合唱団)

☆読者拡大賞 (団体)

- 佐賀分局 (佐賀)
- 神奈川合唱団 (神奈川)
- 名古屋青年合唱団 (愛知)
- 愛知子どもの幸せと平和を願う合唱団 (愛知)

☆読者拡大賞 (個人)

- 松島正行 (大阪・北部センター合唱団)

- 遠藤譲(埼玉・埼玉合唱団)
- 松田さえ子(佐賀・女声合唱団パッソアパッソ)
- 下村信廣(佐賀・合唱団コールぼけっと)
- 清水雅美(福井・福井センター合唱団)
- 箱崎作次(東京・三多摩青年合唱団、三多摩教職員合唱団)
- 藤村記一郎(愛知・愛知子どもの幸せと平和を願う合唱団)
- 新保正秋(大阪・大阪北部センター合唱団応援団)

【音楽センター】

該当団体なし

◆2022年入退会団体

入会団体

- キアラ・コンパニニア(大阪)
- うたごえとどけ隊(埼玉)
- MATRA(京都)
- 風のふくま(大阪)
- うたごえサークルおたまじゃくし(愛知)
- なかま35(京都)
- 「平和の旅へ」合唱団・福岡(福岡)
- リカントーレ(岐阜)
- 合唱団空(東京)
- 希望の楽団(埼玉)
- 合唱団コーシカ(北海道)
- 福知山新婦人ゆらら(京都)
- かつらがわうたう会(京都)
- たんぽぽ(兵庫)

- ウイングス(大阪)

退会団体

- 音戸ファミリーコーラス(広島)
- 女声アンサンブルふきの会(東京)
- がんばれベアーズ(熊本)
- 神戸市職員コーラスゆいまくる(兵庫)
- うたごえサークルゆうな(沖縄)
- 新婦人嵯峨コーラス(京都)
- JAL原告団合唱団フェニックス(東京)
- ファーストレディース運営委員会(京都)
- 京都郵便合唱団(京都)
- 宮崎県北うたう会(宮崎)
- 和泉市職労うたごえサークルひこうき雲(大阪)